

## 中国近代翻訳事情

著者	井波 律子
雑誌名	文学における近代 転換期の諸相
巻	22
ページ	125-138
発行年	2001-03-30
その他のタイトル	Chugoku kindai honyaku jijo
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005396">http://doi.org/10.15055/00005396</a>

## 中国近代翻訳事情

### 外国小説の翻訳概況

中国では十九世紀の末から二十世紀の初めにかけて、おびただしい量の翻訳がなされた。文学に限って見ても、一八七〇年代から、五・四運動が起こった一九一九年までの約半世紀に翻訳された外国の文学作品（小説・戯曲・詩など）は、郭延礼著『中国近代翻訳文学論』（湖北教育出版社、一九九八年）によれば、二千七百種にかなんとするという。

圧倒的多数を占めるのはいうまでもなく小説の翻訳であり、長篇・短篇おりまぜて総数二千五百六十七種、うち原著の国籍の判明しているものは、千七百四十八種だとされる。このうち、もつとも多いのがイギリスの小説（千七十一種）、ついでフランス（三百三十一種）、ロシア（百二十三種）、日本（百三種）の順になる。日本の小説は意外に少な

く、日本語から重訳された外国小説（ロシアの小説が多い）約百八十種を合わせても、イギリスはむろんのこと、フランスにも及ばない。

どんな作家の小説が翻訳されていたかというと、これがまさに玉石混淆。今も高く評価される著名な作家の名作もあれば、時の経過のなかで淘汰され、原著（著者・原題など）さえ不明なものもある。試みに、翻訳された主要作家を国別にあげて見れば、以下のとおりである。

〔英国〕 莎士比亞（シェイクスピア）、丁尼生（テニソン）、笛福（デフォォー）、司可特（スコット）、斯威夫特（スウィフト）、王尔德（ワイルド）、柯（可）南・道尔（コナン・ドイル）、拝倫（バイロン）、雪莱（シェリー）

〔フランス〕 大仲馬（大デュマ）、小仲馬（小デュマ）、雨果（ユゴー）、莫泊桑（モーパッサン）、龔古尔兄弟（ゴンクール兄弟）、儒勒・凡尔納（ジュール・ヴェルヌ）

井波 律子

- 「ロシア」 普希金（プーシキン）、葉蒙托夫（レールモンツフ）、契  
 訶夫（チェーホフ）、屠格涅夫（ツルゲーネフ）、高尔基（ゴリキー）  
 「日本」 徳富蘆花、押川春浪、黒岩涙香  
 「ドイツ」 歌德（ゲーテ）、海涅（ハイネ）  
 「スペイン」 塞（西）万提斯（セルバンテス）  
 「アメリカ」 斯托夫人（ストー夫人）、馬克・吐温（マーク・トゥ  
 エイン）、欧文（アーヴィング）  
 「ノルウェー」 易卜生（イブセン）  
 「デンマーク」 安徒生（アンデルセン）  
 「インド」 泰戈尔（タゴール）

これを見ると、イギリス・フランス・ロシアの小説については、  
 かなり幅広く網羅されていることがわかる。しかし、日本の小説に  
 ついては、押川春浪や黒岩涙香など当時の流行作家の作品の翻訳が  
 大半を占め、二葉亭四迷・幸田露伴・樋口一葉・夏目漱石らの作品  
 は一篇も翻訳されていないのが目立つ。

それはさておき、実のところ、上記の翻訳の大半は一八九〇年代  
 以降（とりわけ一八九五年以降）になされている。この翻訳ブーム  
 の先駆けになったのは、アメリカの作家エドワード・ベラミー（中  
 国では現在、愛徳華・貝拉米と表記。一八五〇～一八九八）の著し  
 た未来小説『ルッキング・バックワード』（Looking-Backward

2000-1887）である。

著者のベラミーは、弁護士出身のジャーナリストだが、『ルッキン  
 グ・バックワード』は、一八八八年、刊行と同時にベストセラーと  
 なり、アメリカとイギリスで百万部売ったとされる。

### 『百年一覚』の物語展開

『ルッキング・バックワード』刊行の三年後の一八九一年、早くも中  
 国で翻訳が出現、これを皮切りに以後、次にあげる三種の翻訳がな  
 された。

#### 一、『回頭看紀略』（析津訳）

「万国公報」（一八九一～一八九二連載）

#### 二、『百年一覚』（李提摩太節訳）

上海広学会刊（一八九四）

#### 三、『政治小説 回頭看』（訳者未詳）

「繡像小説」（一九〇四年に連載）

三種とも全訳ではなく、節訳すなわちダイジェスト版である（全  
 訳の刊行ははるかに遅れる。初訳から百有余年後の一九八四年、商  
 務印書館から刊行された、林天斗・張目謀訳『回顧』がこれにあた

る)。ダイジェスト版ながら、このアメリカの未来小説の翻訳は、中国の知識人に強い衝撃を与えた。三種の翻訳のうち、とりわけ広く読まれ、深甚な影響を与えたのは二番目にあげた、李提摩太<sup>リ・チ・モ・タイ</sup>訳の単行本『百年一覚』である。なぜ、この小説が中国の知識人にとってそんなに衝撃的だったのか。それを考えるに先立ち、まず『ルッキング・バックワード』すなわち『百年一覚』の物語展開を見てみよう。

ときは一八八七年、舞台はアメリカの首都ワシントン。主人公のウェスト（一八五七年生）は当年とって三十歳、先祖の遺産で悠々自適の生活を送る青年であり、イデイス・バトラーなる美貌の婚約者がいる。何の不足もなさそうなのに、どうしたわけか、彼は強度の不眠症に悩まされている。ワシントンにある先祖代々の古い屋敷に、黒人の下僕と二人で住んでいるのだが、周囲に工場が建ちはじめ、日夜、騒音が絶えないため、不眠症はつのる一方だった。たまりかねたウェストは地下に寝室を作った。この地下寝室は完璧に防火・防水設備を施し、空気管を通して地上から清浄な空気を導入する仕掛けになっていた。

こうして外界から完全に遮断された密室状態の地下寝室にこもっても、ウェストの不眠症はなかなか解消しない。そこで、一八八七年五月三十日、彼は医者から睡眠薬をもらって飲み、ようやく深い眠りに入った。ところが薬がききすぎたのか、なんとウェストはそ

のまま百十三年間も眠りつづけ、目がさめてみると、すでに西暦二〇〇〇年になっていた。実は、彼が眠った直後、屋敷が火事で丸焼けになったが、防火設備の整った地下寝室にいた彼は難を免れた。しかし、地下寝室の所在がわからなくなったため、誰にも発見されず、そのままずっと眠りつづけていたのである。不思議なことに、この間ウェストはまったく年をとらず、三十歳の青年のままだった。

二〇〇〇年の現在、ウェスト邸の跡には、リドーという老医師とその妻、および彼らの美しい娘の三人家族が住んでいた。娘の名は奇しくもウェストの婚約者と同様、イデイスであった（のちに判明するが、この娘はウェストの婚約者の曾孫にあたる）。百有余年の眠りから覚めたウェストをたまたま発見したリドー一家は、時を超えてやって来たこの珍客を心から親切にもてなす。かくして、一八八七年から一足飛びに二〇〇〇年へとタイムスリップしたウェストは、以後、リドー一家の案内で百有余年後の世界を見聞することになる。

つまるところ、この『百年一覚』という小説は、上記のような設定のもとに繰り広げられた、一種の未来旅行記なのだ。これが書かれたのは、主人公のウェストが眠りに落ちたとされる一八八七年であり、当時の人々が百有余年後の西暦二〇〇〇年の世界について、いかなるイメージを持っていたかを知るための、格好の材料でもある。まさしく西暦二〇〇〇年の現在、この小説を読むと、予想が当



たっている場合もあれば、まったくはずれている場合もあり、その落差が実に面白い。概して、当たっているのは、テクノロジーの進歩についてであり、はずれているのは政治・経済体制についてだ。

『百年一覚』に描かれる未来社会は、端的にいえば、空想的社会主義に彩られたユートピア社会である（作者のベラミーは空想的社会主義者だった）。企業はすべて国営化され、経済は徹底した計画経済で貨幣もない。貨幣のかわりに、人々は国家が発行するチケットを受け取り、整備された分配のネットワークを通じて流通する商品を購入する。

国営企業一本槍で計画経済というと、恐ろしく国家権力が強いように見えるが、けっしてそんなことはない。国家の中枢機構を動かす、生産・流通を管理するのは、すべて各生産単位で選挙された人々であり、いわば単位連合体・単位協同体が、国家機構を形成するという仕組みになっているのだ。このため、権力をふるう者もいなければ、汚職で私腹をこやす者もない。貨幣がないのだから、こやしやうがないのだ。以上のような、ユートピア的未来国家のイメージは、西暦二〇〇〇年の現在とは、およそ似ても似つかぬものだ。

また、『百年一覚』のユートピア社会では、あらゆる面において平等の原則が貫徹され、肉体労働も頭脳労働も賃金（受け取るチケット）に差はなく、むろん男女の格差もない。従って、貧富の差もな

く、犯罪もおこらないから裁判所も監獄もない（交通整理などをする警察官だけがごく少数いる）。

このなんともきれいなさっぱりしたユートピア社会で、とりわけ面白いのは、余暇を重視するシステムが完備していることだ。ここでは、だいたいすべての人間が二十一歳まで学校教育を受けたあと、適性に応じて各種の職業（自由業もあり）につくが、どの単位でも定年は四十五歳（在職年数は二十四年間）。あとは年金にあたるチケットを受け取りながら、自分の好きなことをして悠々自適の生活を送る。これが一応のきまりだが、半分の十二年間働き、三十三歳で希望退職し、悠々自適に移行することも可能だ。もっともこの場合は、退職後受け取る年金チケットも半分になる。これまた、この先、年金さえ支給されるかどうかかわらず、下手をすれば死ぬまで働かなければならない、二〇〇〇年の現在とは大違いの、ゆとりあふれる未来イメージではある。

というふうに、『百年一覚』描くところの未来イメージは、政治・経済体制などの面では、実際の百年後の世界と大きく異なっている。しかし、その反面、先にも少しくふれたように、有線放送が発達し、各人がヘッド・ホンに当てて好みの番組を聴くとされるなど、テクノロジーの進歩についての予想は、かなりの確実と言える。考えてみれば、政治・経済・労働問題は、この小説が書かれた百有余年後の現在も大した変化がなく、予想を超えて進歩したのはテクノ

ロージーだけというのも、なんとも情けない話である。

それはさておき、百有余年の眠りから覚めた、この小説の主人公ウェストはリドー一家に導かれて、上記のようにすっかり様変わりした未来社会を、目のあたりにする稀有の体験をした。と、思いきや、実はこれは夢であり、はたと気がついてみれば、ウェストは自邸の地下寝室のベッドにいた。むろん、時は変わらず一八八七年のままだったというのが、この小説のオチである。

## 『百年一覚』の影響

未来にユートピア社会を設定する、このペラミーの小説『ルッキング・バックワード』のダイジェスト翻訳版、『百年一覚』が一八九四年に刊行されると、大きな反響を呼び、当時の中国の知識人に測り知れないほどの影響を与えた。

ユートピア（理想郷）のイメージそのものは、古くは春秋時代（前七七一〜前四〇三）の中頃に生きた、道家思想の祖、老子の著とされる、『道德経』第八十章の「小国寡民」ユートピアや、東晋の詩人陶淵明（三六五〜四二七）の手になる『桃花源の記』に描かれるユートピア（桃源郷）等々の例があり、中国人にとってはけっして珍しいものではない。ただ、周知のごとく、陶淵明描くところの桃源郷では時間が停滞し、五百年前の生活スタイルがそのまま維持さ

れていた。これを嚆矢として、中国では従来、過去の時間帯にユートピアを設定するのが慣いだ。この国ではもともと尚古主義が幅をきかせ、太古の時代にユートピアがあり、時代が下るとともに状況がわるくなるという考え方が支配的だったのである。

これに対し、『百年一覚』は未来にユートピアを設定しており、これがまず当時の中国の知識人にとって非常に衝撃的だった。極言すれば、この衝撃が、中国の知識人をして従来の過去志向から未来志向へと、ベクトルを転換させる契機の一つになったとさえいえるほどだ。むろん『百年一覚』に描かれた、君主のいない平等な社会のイメージじたい、衝撃的だったことはいまでもないが。

ここで、きわめて注目に値するのは、この未来ユートピアという、従来の中国に存在しない新しい発想を受け入れるために、当時の中国の知識人が、またまた極め付きの古典を引き合いに出すという操作を行っていることだ。康有為（一八五八〜一九二七）著『大同書』（一九〇二年頃に完成）には、当時の中国の知識人がいかに外来の新思想を受容しようとしたか、そのプロセスがくつきりと刻み込まれている。付言すれば、『大同書』は、中国の古典を拠りどころとしながら、未来ユートピア社会のイメージを描いた作品にほかならない。

『大同書』が拠った主要な古典は、儒教の聖典『四書五経』の一つ、『礼記』の「礼運篇」と、同じく『春秋』に解釈を施した三伝（『春

秋左氏伝」「春秋公羊伝」「春秋穀梁伝」の一つ、「春秋公羊伝」の二種である。「礼記」「礼運篇」には太古のユートピア「大同」についての言及があり、また「春秋公羊伝」は中国の伝統思想のなかで、例外的に未来志向性のつよい書物である。康有為は「大同書」執筆にさいし、これらの古典を縦横に活用し、とりわけ「春秋公羊伝」に由来する公羊家の「三世論」からヒントを得て、歴史の推移を「衰乱」「升平」「太平（大同）」の三段階に分け、時代が進むにつれて、人間社会はユートピア（太平・大同）に近づくとする説を、大々的に展開した。

『大同書』に描かれる未来ユートピア「大同社会」では、国家・階級・人種・男女等々の差はすべて廃絶され、全産業は公営となり、一つの世界政府のもとに無数の小政府が置かれ、自治が行われるとされる。一見したところ、ベラミーの『百年一覚』に描かれる未来ユートピアとの類似性は歴然である。康有為は『大同書』において、こうして儒教の聖典に依拠しつつ、外来のユートピア思想を巧みに受容・展開することに成功した。これぞまさしく古い革袋に新しい酒を盛る、苦肉の策だったといえよう。

以上のように、『百年一覚』は尚古主義を旨とする伝統中国の時間観・歴史観に揺さぶりをかけ、当時の知識人の意識のベクトルを転換させる契機の一つになった。これとともに、いま一つ、『百年一覚』

の翻訳は、看過できない重大な影響をもたらした。それは、中国の知識人に小説というジャンルの見直しを迫ったことである。『百年一覚』が翻訳・刊行された当初、誰もこれが小説だとは思わず、小説だとわかったとき、中国の知識人はまたまた衝撃を受けたという。

なるほど、中国には「文」を重んじる伝統が厳として存在する。しかし、伝統中国において「文」といえば、詩と文（文言で書かれた散文）のみを指し、小説は含まないのが常識である。むしろ、中国においても小説は古くから作られつづけて来た。

中国古典小説の流れは二つに大別することができる。一つは、文言すなわち書き言葉で著された小説であり、今ひとつは白話すなわち話し言葉で書かれた小説である。

前者、文言小説の流れは、八世紀後半の中唐以降に盛行した、唐代の短篇小説群「唐代傳奇」を皮切りに、十九世紀の清末に至るまで、士大夫知識人が筆のすざびに著す「筆記小説」として、連綿と受け継がれてゆく。なにしろ筆のすざびなのだから、いくら文言を用いていても、正統的な詩文に比べれば、そのランクが格段に落ちるのはいうまでもない。

かたや、白話小説の起源となったのは、十世紀の宋代以降、盛んになった民衆世界の語り物である。これを文字化した講釈師のテキストを「話本」と称するが、この「話本」の文体には通常、講釈師の語り口をそのまま生かした、話し言葉の「白話」が用いられる。

その後の中国古典小説史の主流となったのは、実は、この素性卑しき「話本」を源流とする、白話小説の方である。明代に刊行された「四大奇書」すなわち「三国志演義」「水滸伝」「西遊記」「金瓶梅」の四大白話長篇小説のうち、前三書はいずれも種々の「話本」を整理・集大成して成ったものであり、残る「金瓶梅」もまた、書き出しの部分に「水滸伝」の一部を転用するなど、「話本」との深いつながりが認められる。

その後、十八世紀中頃の清代中期、曹雪芹そうせつしんによって著された『紅樓夢』は、まさに中国古典小説の最高峰とみなされる傑作だが、これまた白話で書かれた長篇小説にはかならない。『紅樓夢』はかなりの期間、写本で流通したあと、ようやく刊行されたが、その後、清末に至るまで、これを読まない士大夫知識人はないというほど、流布しつづけた。しかし、こうした現象も小説を正統的詩文より一段劣ったジャンルとみなす、伝統的な文学観をくつがえすには至らなかった。つまるところ、伝統中国では、その文体が文言であれ白話であれ、駄作であれ傑作であれ、総じて小説を「消遣しょうてん（気晴らし）」の具として、蔑視する見方が一般的だったのである。

しかし、十九世紀末、『百年一覚』が翻訳・刊行されると、こうした牢固たる文学観に変化がおこり、小説というジャンルを見直す動きがはじめる。たとえば、清末から中華民国初期にかけての大ジャ

ーナリスト梁啓超りやうきようすう（一八七三—一九二九）は、『百年一覚』の読後感をこう記している。

『百年一覚』もまた小説家が表現したもののだが、百年後の世界の状態を推測し、そのなかにはかなり『礼記』『礼運篇』に述べられた「大同」の意味と符号するものがある。これまた「奇文（卓越した文章）」と言うべきであろう。（『西学書を読む法』一八九六年）

『百年一覚』から即座に『礼記』『礼運篇』を想起するあたり、先述の康有為の場合とまったく同様である。この文章を書いた六年後の一九〇二年、梁啓超は『百年一覚』を下敷きとし、自ら『新中国未来記』と題する未来小説を書いた。梁啓超にとっても、『百年一覚』の衝撃がいかにつよかったか、わかっていうものだ。しかし、梁啓超はここからさらに一歩踏み出して、やはり一九〇二年、「小説と政治の関係について」なる文章を著し、そのなかで小説の重要性を大々的に説き、「小説界変革」を提唱するに至る。この文章の冒頭で、梁啓超はこう高らかに宣言する。

一国の国民を変革しようとすれば、まずその国の小説を変革しなければならぬ。だから道德を変革しようとすれば、必ず小説を変革しなければならず、宗教を変革しようとすれば、必ず小説を変革

しなければならず、政治を変革しようとすれば、必ず小説を変革しなければならず、風俗を変革しようとすれば、必ず小説を変革しなければならず、学芸を変革しようとすれば、必ず小説を変革しなければならぬ。はたまた人心を変革し、人格を変革しようとする場合も、必ず小説を変革しなければならない。なぜなら、小説には人の生き方を支配する不思議な力があるからである。

梁啓超はここで、才子佳人小説や怪異小説がその大半を占め、単なる「消遣」の具、娯楽の対象にすぎなかった小説のジャンルを改革することこそ、中国の「国民を変革」し、政治・社会・文化を改革するための起動力になると主張する。非常に誇張した表現を用いているものの、この提言は中国文学における伝統的な価値観をくつがえし、小説の地位を飛躍的に高めることになった。もともと、梁啓超はあくまで政治運動家・社会運動家であり、小説をして民衆を啓蒙・教化するための一つの手段とみなしていることも、見落としてはならない事実ではあるけれども。

ともあれ、未来小説『百年一覚』の翻訳は、以上のように、十九世紀末の中国に想像を絶するほど大きな影響を与えた。むしろ、この作品のみが、中国人の時間意識を過去志向から未来志向へと転換させ、小説というジャンルに対する伝統的な見方をくつがえしたとはいえないが、少なくともそうした転換をうながす、重要な呼び水

になったことは確かである。

### 翻訳界の三巨人

実は、『百年一覚』が翻訳・刊行され、大きな反響を呼んだ一八九四年、日清戦争が勃発し、翌九五年には中国（清王朝）の敗北が決定となった。この後、西洋列強と日本は利権を要求し、ますます露骨に中国大陆に踏み込むようになる。アヘン戦争このかた、西洋列強は日増しに中国に対する圧迫を強めていた。むしろこれに対する危機感もなかったわけではないが、何といっても西洋諸国は遠い国々であり、中国人は「焦眉の急」というほどの切迫感を感じなかったとおぼしい。しかし、それまで問題にもしていなかった隣の小さな島国日本が、いつのまにやら力をつけ、これと戦い敗北したことは、中国の知識人にとってまさに寝耳に水、信じられないショックだった。

かくして、日清戦争に敗れた直後から、これではならじと、康有为や梁啓超ら立憲君主制を説く改革派知識人はそれぞれひそかに準備を重ねた末、一八九八年六月、当時の皇帝（こうし）光緒帝のもとに結集し、政治・経済・社会機構の抜本的改革を断行しようとはかった。しかし、このいわゆる「戊戌の変法」運動は、三か月後、保守勢力を率いた実力者の西太后（光緒帝の叔母）がおこしたクーデタによって、

あつけなく叩き潰され、康有為や梁啓超は日本に亡命する羽目になった。こうして日本に亡命した梁啓超によって、中国近代翻訳事情は新たな局面を迎えることになる。

日本に亡命した梁啓超はてつとり早く西洋の思想や文学を受容するために、翻訳の近道として、日本語からの重訳を提唱した。横文字はマスターするのに、どんなにがんばっても数年はかかる。しかし、日本語の場合、聡明な者なら十日、飲み込みのわるい者でも二か月あればマスターできると、いうのである。ちなみに、梁啓超には日本語習得にまつわる有名なエピソードがある。日本に亡命する船のなかで、それまでまったく日本語の知識がなかったにもかかわらず、簡単な手ほどきを受けて『佳人之奇遇』（柴四郎著）を読み、たちまち日本語をマスターしたというものである（のちに自ら翻訳。一九〇〇年に刊行された「清議報」に連載）。さらに日本到着後まもなく、矢野竜溪著『経国美談』も読んだとされる（これものちに翻訳）。こうしてすんなり日本語をマスターした梁啓超は、自らの経験を生かし、中国人が効率よく日本語をマスターするための手引き書まで著した。『和文漢読法』（全四十一節）がこれに当たる。その冒頭第一節には、次のように記されている。

およそ日本の文法を学ぶために、もっともわかりやすく、かつもっとも肝心なことは、その文法（語の配置）が中国とは逆だという

ことである。日本語では実字（名詞）が必ず上になり、虚字（名詞以外の品詞）は必ず下に来る。たとえば、中国語の「読書」は日本語では「書ヲ読ム」となり、中国語の「遊日本」は日本語では「日本ニ遊ブ」となる。その他の語法もみなこの類いである。

文法学者が聞いたなら目をまわしそうな大胆な説明方法だが、実用的であることはまちがいない。これはほんの一例だが、全四十一節にわたり、懇切丁寧に中国語と対照させながら日本語の特性を解説した、この『和文漢読法』は、日本に留学する中国人の間で便利な実用書として、長らく珍重されたという。

梁啓超は自ら編み出した、このユニークな和文漢読法によって、ジュール・ヴェルヌ著『十五小豪傑（十五少年漂流記）』（森田思軒訳の重訳）をはじめ、かねての念願どおり、何種類もの西洋の小説を日本語から重訳した。

従来の通説では、梁啓超は明治の政治小説である『佳人之奇遇』と『経国美談』を読んで感激し、日本の小説に啓発されて、先述した中国の「小説界変革」を思いつたとされる。むしろ、そういうこともなかったとは言いい切れない。しかし、それよりも何よりも、当時の中国の知識人の多くがそうであったように、アメリカの未来小説『百年一覚』に衝撃を受けた原体験をもつ梁啓超は、日本に亡命後、日本語を媒介として、欧米の思想や文学を効率よく吸収する

ことを最重点目標とした。だから、梁啓超の究極の目標は日本ではなく、やはり欧米の思想・文学の受容にあったといふべきであろう。

さて、梁啓超が戊戌変法運動に失敗し、日本亡命を余儀なくされていた間、中国国内の翻訳事情はどのように展開したか。まず、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、中国翻訳界に、梁啓超と肩を並べる二人の巨人が出現する。嚴復（一八五三―一九二二）と林紓（一八五二―一九二四）である。この二人の翻訳家は、中国近代の翻訳について語られるとき、必ず引き合いに出される人々であり、彼らに関する研究なら枚挙に暇がないほど存在する。したがって、ここではごく簡単にそのポイントを紹介するにとどめたい。

嚴復は梁啓超よりちょうど二十歳年上。福州（福建省）の海軍学校を卒業後、一八七七年、数え二十五歳のときに、海軍技術を学ぶためにイギリスに留学した。二年間の留学期間中、専門の海軍技術を習得するかたわら、積極的に西洋の政治制度や思想を学んだ。

嚴復の名を不朽にしたのは、なんとといっても、ダーウィンの進化論にもとづいて著された、ハクスリーの『進化と倫理（"Evolution and Ethics"）』の一部を翻訳した、『天演論』である。英語に堪能な嚴復は人手を借りず、終始一貫、自力でこれを翻訳した。この嚴復訳『天演論』こそ、中国人が自らの手で西洋思想の書物を翻訳した最初の例にはかならない（小説ながら、先にあげた『百年一覚』の中国初訳は一八九一年だが、この訳者はイギリス人宣教師である）。

一八九八年（梁啓超が日本に亡命した年）、「適者生存」「物競天折（競争原理）」を説く『天演論』が刊行されるや、たちまち爆発的な進化論ブームがわきおこった。日清戦争には敗北するわ、戊戌の変法運動は挫折するわで、ますます危機感をつのらせた中国の知識人は争ってこれを読んだのだった。こうしてみると、アメリカのユートピア小説『百年一覚』の描く未来志向と、嚴復訳『天演論』の説く進化論が、十九世紀末から二十世紀初頭の中国の知識人をつよく刺激し、彼らを前のめりに西洋的近代の受容へと向かわせたことがわかる。

嚴復は大反響を呼んだ『天演論』のほか、アダム・スミスの『原富（国富論）』、J・S・ミルの『群己境界論（自由論）』など、数多くの名著の翻訳にあたった。ただ、嚴復はこうして鋭意、西洋思想の紹介に努めながら、彼が翻訳に用いた文体は「古文（古典的文言）」であり、しかも意識的に漢代以前の古文（『四書五経』や諸子に用いられる文体）を模倣した文体を用いた。嚴復には、「信（正確）」「達（達意）」「雅（優雅）」と三拍子そろったものでなければならぬという信念があったのである。なるほど「信」と「達」は翻訳のセオリーになっっているが、「雅」であるために、古文もどきの文体を駆使するものだから、嚴復の翻訳は深遠ではあるが非常に難解であった。これに対して、梁啓超は、



(厳復の) 文章はなほだ深遠ではあるが、力を尽くして先秦の古文を模倣しているために、古書を多読した人でなければ、ちょっとページをめくっただけでは、ほとんど理解しがたい。

(紹介新書「原富」)

と批判を加えた。しかし、厳復は頑として態度を変えず、この優雅にして難解な文体に固執した。一方、厳復を批判した梁啓超自身は完全な白話を用いるまでには至らなかったものの、つとめて平明でわかりやすい文言(新民体)を用いて、文章を著すことを旨としたのだった。

さて、翻訳界の三巨人のうち、最後に残る林紓は、いうまでもなく文学とりわけ小説の翻訳で突出した存在である。林紓は厳復とはほぼ同世代であり、厳復訳『天演論』が刊行された年の一八九八年、アレクサンドル・デュマ著『椿姫』を翻訳、『巴黎茶花女遺事』なるタイトルを付けて刊行した。中国では「唐代伝奇」以来、文言・白話を問わず、妓女の恋はずっと小説の重要なテーマの一つだった。その西洋版ということで、中国の読者に受け入れられやすかったためもあって、『巴黎茶花女遺事』は発売と同時に大ベストセラーとなり、林紓の文名はいっきよに高まった。

これを皮切りに、以後、林紓は百六十種以上の外国小説(英・仏・米・露など十一か国の小説)を翻訳・刊行した。これらは「林訳小説」と呼ばれ、根強い人気があった。以下、「林訳小説」の代表作をあげる。

斯托夫人(米)『黒奴吁天録(アンクル・トム)』

司可特(英)『撒克遜劫后英雄略(アイバンホー)』

笛福(英)『魯濱遜漂流記(ロビンソン・クルーソー)』

哈葛德(英)『三千年艶屍記(洞窟の女王)』

柯南・達利(道爾)(英)『歇洛克奇案(シャーロック・ホームズ)』

斯威夫特(英)『海外軒渠録(ガリバー旅行記)』

西万提斯(スペイン)『魔侠传(ドンキホーテ)』

など。

これはほんの一例にすぎない。おそらく中国の読者は「林訳小説」によって始めて、外国小説のおもしろさを知ったのであろう。ただ、翻訳家とは言い条、実は林紓は、英語に堪能だった厳復や日本語を速修した梁啓超と異なり、まったく外国語ができなかった。それでどうして翻訳ができたのか。林紓にはいろいろな外国語のできる大勢のアシスタントが付いており、彼らが原文に口語訳を付けるのを聞きながら、次から次に自分の文章に書き改めていったのである。この作業は恐るべきスピードで進められ、林紓は一時間で千五百字、一日四時間、計六千字の翻訳を毎日こなしたとされる。中国語の六千字は凄い分量である(日本語にすれば三倍以上の量になるだろう)。百六十種以上もの小説を翻訳をしたのも、むべなるかな、である。

林紓はもともと、優雅で平易、かつ格調の高い文言による表現を



重視した。さらに彼は、清代中期以降、文壇の主流を占めた「桐城派」に属する文人であり、翻訳のさいに用いた文体もまた「文言」であった。ただ、けつして嚴復のように難解ではなく、艶麗でリズムカルな美文調がその身上だった。この魅力的な美文調のゆえに、原著から直接訳したわけではなく、誤訳やはなはだしい意識もしばしば見られるにもかかわらず、読者の圧倒的人気を得たのである。

「小説」というジャンルに対する見方を変え、日本語を速修して西洋文化を吸収せよと説いた梁啓超。進化論を中国にもたらした嚴復。

「林訳小説」によって外国小説を大々的に中国に紹介した林紓。この中国近代翻訳界の三巨人は、近代中国に外国文化を導入するための水先案内人として、それぞれ大いなる成果をあげた。しかし、彼らの生の軌跡を最後までたどるとき、そこには劃然とした差異が認められる。

先にも少しくふれたように、できるだけ白話に近い、平明な文体（新民体）を用いることを提唱し、これを自ら実践した梁啓超は、最後まで時代の流れと噛みあう鋭敏な問題意識を失わず、死ぬまで傑出したジャーナリストでありつづけた。

これに対し、優雅にして難解な古文を死守した嚴復と、美文調に乗せた古文を華麗に操ることを旨とした林紓は、一九一七年に初めて提唱され、二年後の一九一九年の五・四運動を経て、大規模な展開をみせた文学革命（白話によって小説を書くことなどを主張する

文学運動）の高まりのなかで、完全に保守反動化し、時代の動きから取り残された。

嚴復と林紓は梁啓超に比べ二十歳も年長であり、激変の時代に対する感受性に落差があつたことは否めない事実である。それにしても、意識は文体を決定するというべきか、あるいは文体は意識を決定するというべきか。中国近代翻訳界の三巨人が描いた生の軌跡は、期せずして、意識と文体の深い相関関係をまざまざと映し出している。

以上、『百年一覚』を皮切りに、梁啓超、嚴復、林紓と、中国近代翻訳界の大立者の事迹をざっとたどってみた。このほか、やはり十九世紀末から翻訳されはじめ、圧倒的に歓迎された外国小説といえ、まず「偵探小説（探偵小説）」に指を屈するだろう。探偵小説（ミステリ）は西洋においても近代の産物だが、中国ではむしろ十九世紀末まで、探偵小説などというジャンルは影も形もなかった。とはいえ、これに類するものは古くからあることはあつた。明末の万曆年間（一五七三～一六二〇）に成立した短篇小説集『龍図公案（包公案）』を代表とする、裁判官が名裁きを披露する「公案小説」のジャンルがこれに当たる。

それはさておき、裁判官ならぬ探偵が大活躍し、もつれた事件を解決するという趣向の、西洋の探偵小説が、中国で最初に翻訳され、活字になったのは、一八九六年だった。この年、上海で発行されて

いた新聞「時務報」に、柯南・道尔つまりコナン・ドイルの手になる四篇の短篇小説が、『喝洛克尔唔斯筆記（シャーロック・ホームズ物語）』というタイトルで、連載されたのである。訳者は張坤徳<sup>ちやうこんとく</sup>。日本でホームズ物の翻訳がなされるのは、この三年後だから、いかに中国語訳が早かったか、わかうというものだ。

これを嚆矢として、以後、ありとあらゆる種類の探偵小説が翻訳されたが、断然トップの座を占めたのは、やはりホームズ物だった。コナン・ドイルがさかんにホームズ物を執筆し、イギリスで人気を博したのは一八九〇年代以降であり、中国ではほぼ同時代的に次々へとこれらの作品の翻訳・刊行が行われた。この結果、一九一六年に上海中華書局から刊行された『福尔摩斯偵探全集（ホームズ探偵全集）』において、ほぼすべてのホームズ物を翻訳・収録する快挙を成し遂げたのだった。

同時代の日本では、これほどホームズ物がもてはやされた形跡はない。おそらく名裁判官の活躍を描く公案小説を読み慣れた中国の読者にとって、名探偵シャーロック・ホームズの活躍するコナン・ドイルの探偵小説は、別してとつきやすかったのであろう。

中国語に訳された探偵小説、とりわけホームズ物の読者は、楽しく読書に耽りながら、西洋の風俗や制度を臨場感を以て受けとめ、知らず知らずのうちに異文化体験を深めていった。しかもホームズ物はほぼ同時代的に翻訳されたのだから、それこそホットな情報も

満載されており、中国人読者はまさしく居ながらにして、現在形の西洋社会を目の当たりにすることができた。こうしてみると、探偵小説の翻訳が中国の近代に与えた影響にも、けっして軽視できないものがあるといえよう。

## おわりに

以上、ざっと概観してきたように、十九世紀末、ことに一八九五年、日清戦争に敗北してからというものの、中国は外国の文学や思想の翻訳を通じて、外国文化を受容し、近代に移行する手がかりをつかもうと、前のめりの全力疾走をつづけて来た。しかし、外なる文化を取り入れることに夢中になるあまり、自らの内なる文化を十把ひとからげに古い遅れたものと見なし、無視する傾向がしだいに強まったことは、いかにも残念なことであった。

たとえば、小説のジャンル一つとってみても、先にも述べたように、中国には『紅樓夢』を筆頭とする、外国の小説に比べて、内容・形式ともにまったく遜色のない、非常にすぐれた小説の伝統があるにもかかわらず、当時の中国の知識人の大多数は、これにまったく目をくれようとしなかった。一九一七年から始まった文学革命において、事あたらしく白話で小説を書くことが声高らかに提唱されたが、その実、中国には、これより百五十年余りに、すでに

『紅樓夢』という、非常に整った見事な白話（古白話）で書かれた小説が存在するのである。にもかかわらず、これについては一顧だにしようとしなない。

こうしたなかで、王国維（一八七七一―一九二七）と魯迅（一八八一―一九三六）は、やはり飛び抜けた存在であったといえよう。すなわち、王国維はショーペンハウエルを援用しつつ、『紅樓夢』の物語構造を分析した『紅樓夢評論』（一九〇四）を著し、さらにまた中国における戯曲の歴史をたどった『宋元戯曲考』（一九二二）を著した。これらの著作は、小説や戯曲を俗文学と軽視しつづけてきた中国文学の伝統的価値観を見直し、まさに内側からそうした価値観を逆転させた試みにほかならなかった。

これにやや遅れて、魯迅もまた、ジュール・ヴェルヌの小説『月世界旅行』『地底旅行』の翻訳（一九〇三―〇四）や、東欧の小説の翻訳（『域外集小説集』。一九〇九）を行ったあと、『中国小説史略』（一九三三―三四）を著し、中国小説史をたどり直したのだった。

王国維と魯迅は西洋の思想や文学にどっぷり骨の髄まで浸る経験を通してのち、ひるがえって、まさに中国の内なる伝統のなかから、近代につながる鉅脈を掘り起こそうとした。伝統のなかに近代を探ろうとする、彼らの試みは、西洋の思想を理解するために儒教の古典を引き合いに出したり、西洋の書物を、莊重・優雅な中国古

文のスタイルで翻訳するといった折衷的な方法とは、根底的に異質なものであった。

ありとあらゆる異文化が洪水のように押し寄せ、さまざまな思潮が入り乱れ、凄まじい量の外国書が引きもきらず翻訳された、十九世紀末から二十世紀初めの中国。中国近代の錯綜した翻訳状況は、百年後の現在の中国の状況と、どこか深く通底するものがある。まさにこの道はいつか来た道。中国は今一度、伝統の中に近代をとらえ返そうとした、王国維や魯迅の試みの意味を、考えてみる時期に来ているのではなからうか。